

応用認知言語学の観点から見たモダリティの意味変化の類型論的研究

玉地 瑞穂

A Typological Study of Semantic Change of Modality: The Perspective of 'Applied Cognitive Linguistics'

Mizuho Tamaji*

Abstract

'Applied Cognitive Linguistics' utilizing the theory of cognitive linguistics for the analysis of second language acquisition is known as a new discipline in the area of applied linguistics (Pütz 2001). The author had been conducted a series of research analyzing the process of Chinese learners' acquisition of Japanese modal markers as a study of Applied Cognitive Linguistics (e.g. Tamaji & Horie 2007a, 2007b). These studies are also applicable to analogize the grammaticalization of modality based on the parallelism between language acquisition and diachronic grammaticalization (e.g. Slobin 1977, 1994). This study aims to establish 'Synchronic Typology', the strategic use of such parallelism for the study of grammaticalization (Giacalone-Ramat 2003) as a new trend of 'Applied Cognitive Linguistics'.

Key words: Applied Cognitive Linguistics, Synchronic Typology, grammaticalization, diachronic grammaticalization, second language acquisition

第1節 はじめに

認知言語学は、言語形式の意味・機能のマッピングというカテゴリー化 (Bolinger 1977) が人間の認知過程を構成すると考える。したがって言語習得とはこのマッピングの習得を通しての「特定の話すための思考法 (thinking for speaking)」(Slobin 1994) の習得であり、第一言語と第二言語においてマッピングの仕方が異なる場合には第二言語の習得が難しいことが予想される。

* 高松大学専任講師

このような言語間のカテゴリー化の違いを考慮して、第二言語の学習と指導に認知言語学の知識を応用する「応用認知言語学 (Applied Cognitive Linguistics)」(Pütz et. al. 2001) という新しい学問分野が提唱され、新しい融合的学問領域として認知されつつある。日本においてもこのような観点から多義語の認知言語学的意味分析と第二言語としての日本語の習得さらに日本語教育へという応用認知言語学の観点からの萌芽的研究が見られるようになった (例: 森山2007)。

筆者は、国内外でのこのような「応用認知言語学」の研究動向に触発され、中国人日本語学習者のモダリティの習得研究の認知言語学的分析、および日本語教育への提言を行ってきた (玉地・堀江 2007b)。しかし、これらの研究で得たデータから「共時的類型論」の概念に基づいて日本語のモダリティの文法化 (意味変化) の方向性の分析に関する研究 (玉地・堀江 2007a, 印刷中) や学習ストラテジーの分析から文法化を促進する要因を分析する研究 (Tamaji & Horie 2007c, 2007d) に発展させることが可能となったため、これらの研究を国内における「共時的類型論」研究の先駆的研究と位置づけることができる。本研究では、この「共時的類型論」の概念に基づいて、日本語と同様に他の言語の習得データからそれらの言語の文法化の考察を行い、文法化の類型論的研究を行なうという意味で「応用認知言語学」研究の新しい方向性としての確立することの可能性について議論する。本研究の構成は以下のとおりである。

第2節では言語類型論的文法化研究について述べる。第3節では類型論的なモダリティの文法化研究について説明し、第4節では類型論的モダリティの文法化研究では説明しきれない日本語のモダリティの文法化の特徴について述べる。第5節では、日本語のモダリティの文法化の方向性を類推する研究方法としての「共時的類型論」の妥当性について議論し、第6節では実際に行った「共時的類型論」に基づく日本語のモダリティの文法化研究の概要と結果について報告し、第7節では「共時的類型論」を他の言語の習得に応用することによって文法化の認知・文化モデルの構築を試みるのが「応用認知言語学」の新しい方向性となる可能性について議論し、第8節ではまとめを行う。

第2節 言語類型論的文法化研究

2-1. 文法化とは

文法化とは、文法が生じてくるプロセスをさす用語であり、文法化研究とは、我々が目にする言語の文法はどのようにして生まれ、定着していくのかといった問いかけに答え、文法がなぜ今あるような姿をしているのかを説明しようとする、言語学の下位分野のひとつである。Hopper & Traugott (1993) によると、文法化は次のように定義されている。

「語彙項目や語彙的構造がある言語学的文脈において文法的機能を持つようになるという変化のことであり、一度文法化されると、新しい文法的機能へと発展しつづけること」

(Hopper & Traugott 1993: 18日野訳)

文法化という言葉に含まれる文法はまず形態論的な視点から捉えることができ、この見方に従うと、文法は語彙のような拡大可能なクラスではなく、ある限定された数の要素からなる、いわゆる閉じたクラスの形態素の集合である「文法素 (gram)」(Bybee et al. 1994: 3) と呼ばれるものの集合体であると見なすことができる。例えば、日本語の格助詞や「見た」の「た」のような時制の標識のような、文法機能を担う言語形式だと言える。このような形態論的な文法の捉え方に立つと、文法化とは開いたクラスに属する形式が閉じたクラスへと変化する過程と捕らえることができる (宮下 2002)。

2-2. 言語類型論的な文法化研究

文法化研究で目標とされるのは、単に記述的な文法変化を明らかにすることにとどまらず、さらに言語類型論的な視点から、世界の言語にどのような文法変化のパターンがあるのかを明らかにすることが目指される。このような研究の代表的なものに、Bybee et al. (1994) やHeine & Kuteva (2002) が挙げられる。そして言語類型論的な研究方向の中で指摘されるのが、文法化は一方向に進んでいくという認識「一方向性仮説 (unidirectionality hypothesis)」(Heine et al 1991: 32, Bybee et.al.1994: 9, Hopper & Traugott 1993: 95)。である。例えば、Hopper & Traugott (1993) は、「一方向性仮説」を次のように定義している。

「形態素の発展の方向性は、A という段階とBという段階の関係、すなわち A という段階はBという段階よりも先であり、その逆ではない。」(Hopper & Traugott 1993:95)

“The directionality of a morpheme's development is a relationship between two stages A and B, such that A occurs before B, but not vice versa.”

(Hopper and Traugott 1993:95).

この一方向性仮説を先述した現代日本語の「た」の例を用いて説明すると、その起源である完了・存続の助動詞「たり」に比べ、過去時制の標識としての機能が強まっている。この文法上の変化は、意味の変化とも捉えることが可能である。また、文法レベルの変化のもうひとつの特徴は、音韻変化に似て、ある種の規則性が観察されるということである。すなわち文法的な変化が起きる際には変化が起きる前に比べ、よりいっそう文法的な機能を持つ形式へと変化していくのである。そしてこの変化は一方向であり、通常は逆行することはないということから、一方向性仮説と呼ばれる。

Bybee et.al. (1994) による研究では、75の言語のテンス、アスペクト、モダリティが文法化していく方向性に共通性が見られることが報告されているが、多くの言語に同様の方向性が見られるということは、様々な言語共同体に共通するような言語使用者の認知的プロセスに共通性が見られることを意味していると考えられる。

第3節 モダリティの文法化

文法化は統語論的側面、形態・形態音韻論的側面、意味論的側面、語用論的側面といった多くの側面を持ち合わせている。そのため、文法体系に組み込まれるプロセスのあり方は一様ではなく、さまざまな変異がありうる。モダリティの文法化は一般的な文法化研究で見られるような内容語から機能語への変化ではなく、すでに文法的機能を獲得した形式の意味機能がさらに拡大するプロセス（多機能化）や機能的意味の意味区分が固定化されるプロセス（特定の意味への分化）と捉えられている（黒滝 2005）。このような意味変化という形で表現されるモダリティの文法化は、1つの形式で2つ以上の意味・機能を表す多義性（polysemy）(Traugott & Dasher 2002) として認知されている。第2節で述べた文法化の類型論的研究によれば、モダリティの文法化は一方向性仮説によれば以下のような経路で確認されている。

(1) 一般的なモダリティの発展の経路

「主体志向的モダリティ」 > 「話者志向的モダリティ」

「主体志向的モダリティ」 > 「認識的モダリティ」

(2) 特殊なモダリティの発展の経路

「能力のモダリティ」 > 「根源的モダリティ」 > 「認識的可能性のモダリティ」

「義務のモダリティ」 > 「意志のモダリティ」 > 「未来性のモダリティ」

「欲望のモダリティ」 > 「意志のモダリティ」 > 「未来性のモダリティ」

モダリティの文法化研究で最もよく議論されるのが、義務や許可を表す「行為拘束的モダリティ (deontic modality)」から話者の命題の事実性に対する認識を表す「認識的モダリティ (epistemic modality)」への変化である (Palmer 2001)。この変化は上記のBybee et al (1994) の研究によれば、「主体志向的モダリティ」から「認識的モダリティ」への変化と同義である。「認識的モダリティ」を表すモーダルマーカが他の種類のモダリティと多義性を持っているなら、そのモーダルマーカの「認識的」用法は歴史的に後で発展したものであると考えられている (Shepherd 1982, Traugott 1989, Bybee et al. 1994, van der Auwera 1998)。

「行為拘束的」と「認識的」のモダリティの間の関係に関する有力な見解の1つに、これらの概念的根源は「力のダイナミクス」(force-dynamics) のメタファーによって説明される。Talmy (1988: 53) は「行為拘束的モダリティ」の基本は「苦痛を与えるもの」(Agonist) や「焦点の強制を与える存在」(focal force entity) としての根源の概念であると考える。「苦痛を与えるもの」とは典型的に「物理・社会的」相互作用における主体であり、明示的には表現されないような無生物主語を主語とする文章のことである。

Talmyの「力のダイナミクス」に基づいて、Sweetser (1990: 52) はモダリティは決定的に選択に影響を及ぼす意図的な強制力(権威)に関わっていることを主張した。義務を表すモーダルの場合、選択はバリアーの押し付けによって制限され、能力や許可のモーダルの場合はバリアーを上げることによって選択の幅が広げられる。したがってSweetserは「認識的」な領域は義務という物理社会的な世界から推論の世界へのメタファー的マッピングによって理解されるべきだ、つまりメタファー的マッピングは外部的世界という具体的な知覚から抽象的な心理的項目への移動であると主張する。

Sweetser (1991) は、Talmy (1988) の力のダイナミックスに基づく意味拡張を次のように説明した。

(3) John must be at home right now.

上の例文は「ジョンは今家にいなければならない」という「行為拘束的」用法と「ジョンは今家にいるにちがいない」という「認識的」用法に解釈される。「行為拘束的」用法は「話者（と/あるいは何人かの外の行為者）によって押し付けられた現実の世界の力」が「文中の主語（あるいは他人）」に「ある行為の遂行を強制」する。一方、「認識的」用法は「ある主体によって適用された認識的な力」が「話者（あるいは一般の人々）」に「文中に表された結論に達することを強制」する。このように、「行為拘束的」用法と「認識的」用法には共通する力のダイナミックスが作用していると考えられ、「物理的領域における強制力」から「認識的領域における強制力」が派生したと考えられている。このように、「認識的領域の強制力」は物理的領域の対象物であり、「行為拘束的」用法から「認識的」用法が派生したことから、「行為拘束的」用法の方が「認識的」用法よりもプロトタイプ的であると考えられている。

そして、先述したように言語類型論的な文法化研究において、類型論的に異なる言語においてモーダルマーカの意味変化の方向性が「行為拘束的」用法から「認識的」用法へという方向性であることから、この方向性での変化が言語類型論的普遍性であると考えられている。

第4節 日本語のモダリティにおける多義性の欠如とその認知言語学的説明

日本語のモダリティにおいては「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の間に多義性が存在しない。例えば中国語のyīnggāi¹やyàoというモーダルマーカは「行為拘束的」モダリティと「認識的」モダリティの2つのモダリティとして機能する。一方、日本語におけるyīnggāiの「行為拘束的」用法は「べきだ」、「認識的」用法は「はずだ」、

¹ 本研究では、中国語の表記は漢字と発音記号による表記を行う。発音記号の説明は以下のとおりである。第一声（高平音）：妈mā、第二声（上昇音）：麻má、第三声（低平音）：马mǎ、第四声（下降音）：骂mà。

yàoの「行為拘束的」用法は「なければならない」、「認識的」用法は「にちがいない」である。このように、日本語においては「行為拘束的」と「認識的」のモダリティは別のモーダルマーカで表現され、つまり多義性が存在しないということになる。

この多義性の欠如によって、日本語のモダリティにおける「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の関係をめぐって、(1) 2つのモダリティの間に連続性はなく、どちらのモダリティがプロトタイプ的ではないという見解(山田 1990)と(2) 日本語のモダリティにおいては「認識的モダリティ」の方が「行為拘束的モダリティ」よりもプロトタイプ的であるという見解(黒滝 2005)が見られる。

これらの2つのモダリティの関係を確認するためには、通時的観点から分析をしなければならないが、古典日本語と現代日本語との間には連続性がないため、通時的観点から確認することができない(尾上 2003)。そこで、本研究では言語習得、特に第二言語習得のデータに基づいて当該言語の類型論的特徴を記述するという共時的類型論の概念に基づいて日本語のモダリティにおける「行為拘束的」モダリティと「認識的」モダリティの関係を考察する。次節では「共時的類型論」についての説明を行う。

第5節 共時的類型論：文法化と第二言語習得の関係

言語類型論的な文法化研究は、異なる言語体系において共通の通時的な文法化の方向性が確認されることを示すものである。このような意味変化の規則性という通時的文法化の過程と個人の言語習得における多義性の習得順序にパラレルの関係が見られることが報告されている(例:Slobin 1977, 1994)。このことから、個人の文法の習得過程という文法化の「個体発生による系統発生の再現仮説(The hypothesis that ontogeny recapitulates phylogeny)」が提唱されるようになった。この仮説はもともと生成文法学者により子どもの第一言語習得における多義語の意味の習得順序とクレオール化の意味論的發展の間にパラレルの関係があることから提唱された仮説であるが、現在では第二言語習得過程で見られる文法化から当該言語の文法化の経路を類推するという「共時的類型論」(synchronic typology)(Ramat 2003)の研究へと発展した。

5-1. 個体発生による系統発生の再生の仮説

「共時的類型論」についての説明をする前に、その基礎と成っている「個体発生による

系統発生の再現の仮説」についての説明を行う。言語変化が子どもの言語習得によって第一次的にもたらされるという仮説は、個体発生が系統発生を再現する（個人の習得が言語変化を再生する）という仮説に密接に関係している。個体発生の系統発生的再現の仮説は生成文法においては、われわれの知的機能は（知性の内容である「知識」は言語習得とともに徐々に習得されるものであるにもかかわらず）論理の形式的メカニズムとともに生得的に寄与されているという“Chomskyan neo-preformationism” (Gould 1977: 146) として提唱されたものである。

この仮説のもっとも顕著なものに、子どもの言語習得の順序がハワイ語のクレオール化される軌跡を確認したものであると主張するBickerton (1984) の「生得的プログラム仮説 (bioprogram hypothesis)」がある。1970年代にも、子どもの意味論的習得とクレオール化の意味論的発展の間に、「空間」を意味するものから「時間」や「時制」を意味するものへと変化し、さらに「条件」を意味するものへとという変化の平行性が見られるということは繰り返し主張されていた (Slobin 1977, Baron 1977)。

Slobin (1994) は（第一言語としての）子どもの英語の現在完了形の習得と現在完了形が通時的に文法化してきた過程の間にパラレルの関係があることを報告している。同様の研究は、Erbaugh (1986) の中国語を母語とする子どもの数量詞の習得において、具体的な物質の数を表す数量詞の方が抽象的な名詞の数を表す数量詞よりも習得が早いということが、中国語における数量詞のシステムの歴史的な発展順序と共通していること、Wong (2003) による中国語で「与える」(give) を意味する「给gěi」という語彙が許可的使役形 (permissive-causative construction)、与格 (dative)、受身形の順に文法化していったという歴史的变化を、広東語を母語とする子どもから収集したコーパス (Cancorp: Cantonese corpus) で確認したなどという研究も見られる。

この意味変化の「個体発生が系統発生を再現」するという仮説は多義語が歴史的に「中核的な」意味から「派生的な」(周辺の) 意味への順番へと発展していったということが (習得という) 共時的な順に現れるという関心を引き起こす。このような多義語の歴史的な発展順序が個人の多義語の意味の獲得の順序と平行しているということは、Traugott (1986)、Traugott & Dasher (2002) などの研究の基盤となっている意味的变化の規則性、及びLakoff (1987) やSweetser (1990) などによるメタファー理論の中心的概念と一致し、個体発生としての子どもの多義性の習得順序から、系統発生としての通時的文法化としての意味変化の方向性と習得における認知的ストラテジーから意味変化のメ

カニズムをたどることが可能になることを示唆している。

しかし、生成文法による言語習得における意味変化の説明では意味変化のメカニズムの説明には不十分である。この点について、Battye & Roberts (1995) は、次のように説明している。

「我々は所与の言語の歴史的発展は、異なる時代におけることなるパラメーター的価値の変化という観点から分析をすることが可能である。…パラメーター変化のメカニズムは統語の習得における基本的役割を担うパラメーターの設定のメカニズムとともに確認できる。」

“We can analyze the historical development of a given language in terms of differing parametric values at different times. …the mechanisms of parameter changing can be identified with the mechanisms of parameter setting, which are held to play a fundamental role in the acquisition of syntax.”

(Battye & Roberts 1995: 7)

すなわち、ここで、Battye & Roberts (1995) は、言語の変化は各時代におけるパラメーターの違いに起因し、そのパラメーターの変化は、子どもの言語習得にあると考えている。その際、子どもは、親の表出する言語 (E-language) に接し、自らの内的言語 (I-language) を形成するとしている。このような生成文法的な言語変化の説明は、急速な構造変化を予測することが可能になるが、なぜこうした構造変化が必要であったのかを説明することは困難と思われる。また、歴史的な記述としての言語変化は典型的に漸進的なものであり、内的・構造的な変化の急進性は、それを引き起こす要因に関わる問題である。したがって、生成文法による言語習得におけるパラメーター変化では構造変化の原因についての説明には不適切である。

一方Slobin (1994) は、通時的文法化としての意味変化と言語習得順序の間にパラレルの関係が見られたという結果は受け入れつつ、子どもの言語習得という個体発生的な過程と世代の異なる成人による通時的文法化という認知過程の異なるもの間で類推の過程が一致しているという可能性は否定する。その根拠として、Slobin (1994) は英語の現在完了形は談話機能に端を発するものであることを指摘している。子どもが発見するようになる語用論的拡張は通時的に年長の話者によって導入されたものであり、子どもはそれらの用法を会話における推論という長い発展過程を通して習得するのである。語用論的拡張は

複雑な推論に関係し、談話機能は文脈の中で構築されるものなので、われわれは、これらの意味的变化は子どもによって始められたものではないと仮定する。新しい意味は「文化的意味という市場における通貨 (currency in the marketplace of cultural meanings)」(Slobin 1994: 130) として使用されるので、習得モデル (による文法化) は子どもに特有なものではなく、むしろ言語習得において様々な推論的ストラテジーを使用することが期待される若い成人に特有のものであると考えられる (Milroy & Milroy 1985, Eckert 1989)。

5-2. 通時的文法化と第二言語習得の関係：共時的類型論

以上のことから、「固体発生による系統発生の再現仮説」に基づく子どもの言語習得における多義性の習得順序と通時的文法化としての意味変化の規則性の間にパラレルの関係が見られるが、子どもの言語習得より成人の言語習得の結果を検証したほうがより認知的な特徴が反映されることがわかる。しかし、このことからすぐに成人の第二言語習得の結果に通時的文法化の過程が見られるということが言えるであろうか。よく知られているように、言語の表面的な構造は言語間で大きく異なっている。したがって、学習者の第一言語と第二言語としての当該言語の表層構造の違いの影響を受けることより、当該言語の母語話者による第一言語習得と第二言語学習者の習得過程が異なっている、つまり習得という個体発生過程で再現される文法化の過程が異なっていることが予想されるのである。

しかし、このような予想に反する研究結果が報告されることとなった。Ziegeler (1996, 1997) は多数の文章表現の母語話者集団と第二言語話者集団による評価のテストから保持 (retention) の現象を検証した。保持とは文法的形態素の意味の突然の変化というよりはむしろ暫時的な過程 (漂白: bleaching) で、文法形式が語彙的項目としてのももとの機能と結びついた初期の意味 (Bybee & Pagliuca 1987: 112) と定義されている。つまり、保持は意味変化以前の意味の継続と文法的表現が発展した結果としての文法的説明とその文法的表現の初期における歴史的使用との関係を説明することと定義することができる。

Ziegeler (1996, 1997) の調査の結果、保持が母語話者と第二言語学習者の両方に現れたとしても、過剰一般化の程度は第二言語学習者の方が高いことを報告した。なぜ第二言語学習者は即座に母語話者と同じような結果にならないかということを考えなければならぬが、第二言語話者の過剰一般化が自然習得の初期の語彙的段階を省いていることを意味している。つまり、習得の経路はより直接的に、より即効的に漂白された、文法化され

た意味につながっていることを意味していると考えられる。このことは、第二言語習得の結果から当該言語の文法化の過程を類推できること、しかもその過程は第一言語習得においてよりもより直接的に反映されることを意味している。

Giacalone-Ramat (1992, 1995) では、第二言語としての成人のイタリア語学習者が、アスペクトを区別する表現を *sempre* (always), *basta* (enough), *finito* (finished) というように、語彙的項目からより文法化された表現の順に習得するということが報告されている。Giacalone-Ramat (1992) は、古典的な文法化と違って第二言語習得において見られる文法化は、新しい文法的形式の創造ではなく目的語における様々な下位システムへの近接性の創造であると主張する。つまり、通時的文法化と「習得的文法化」(acquisitional grammaticalization)² の関係は次のように要約することができる。

- (i) 通時的文法化と習得的文法化の過程において、明確な文脈依存が見られる。言語進化(通時的文法化)においては、文法化は特殊な統語論的、意味論的、推論的な文脈において出現するが、第二言語習得においては、文法的なコード化もまた特殊な文脈において出現する。
- (ii) 文法化が出現する文脈は繰り返しの割合が高い。新しい文法的な項目は(文法化においても習得においても)語彙や統語論、語用論的動機付けによって補強される。
- (iii) 繰り返しの割合の高さのために、通時的、習得的にも文法化は最もプロトタイプ的なカテゴリーの使用において出現し、後に類推的にプロトタイプ性の低い文脈において出現する。

つまり、習得的文法化とプロトタイプ理論は形態論的区別の根源としての類推的な動機付けに対して重要な役割を果たす。習得的文法化とプロトタイプ理論は言語研究とカテゴリー化の研究に対する機能的・認知的アプローチという点で一致している。

Ziegeler (1996, 1997) や Giacalone-Ramat (1992, 1995) の研究が示唆していることは、

² Giacalone-Ramat (1992) では習得過程で現れる通時的文法化の過程を「習得的文法化」と呼んでいるが、これは生成文法学者らの言う「文法化の個体発生過程」と同義と捉えられる。

第二言語習得過程で見られる学習者の個体発生的文法化と当該言語の通時的文法化の関係を検証することの意義は両者の間にパラレルの関係が見られるかどうかということも重要であるが、それ以上に、第二言語習得における学習ストラテジーという認知的プロセスから通時的文法化の内的要因である認知的・コミュニケーション的ストラテジーを類推することの重要性であると考えられる。このことは、言語類型論的研究が言語間の表面的な構造の違いにもかかわらずコード化の方法の選択において望ましい経路を提示すること (Croft 1990, Stassen 1985, Keenan & Comrie 1977) と関係している。つまり、第二言語習得の過程で見られる個体発生的な文法化は、「源泉的言語」(source language) と「目標言語」(target language) の両方が包括するほんの一部分の潜在的に使用可能なストラテジーであり、学習者の変異はそのどちらとも異なる選択を提示するかもしれないが、潜在的に使用可能な選択肢の幅の中に納まるものであることが予想される。したがって、その結果から第二言語習得において確認された文法化過程を基に、どのように普遍的な認知的ストラテジーから言語学的カテゴリーを抽出するかということについて重要な情報を提供することができるという点において、第二言語習得の結果が我々に提示する言語類型論的知識と言えよう。Giacalone-Ramat (2003) は、このような第二言語習得における習得的文法化の過程に基づいて言語類型論的知識を導き出すことを現在進行中の(共時的)文法化から通時的な言語類型論的な文法化の過程を導き出すという意味で「共時的類型論(synchronic typology)」と呼ぶ。

以上、言語習得という文法化の「個体発生」過程から通時的文法化という「系統発生」過程を類推することが可能であること、及び第二言語習得データを用いることの妥当性について述べてきた。この「共時的類型論」は研究方法としても通時的文法化研究よりも洗練された方法であると考えられる。

一般的な文法化研究は、特定の言語において出現した用例を辿るという通時的研究によって人間の言語の進化の過程を研究することと捉えられている。しかし、このような通時的研究は直接観察することができないだけでなく、文法化されたもの結果の理論化であり、文法化が進行する過程の観察や理論化ではないという問題点がある (Halliday 2004)。しかし、「共時的類型論」では第二言語習得という現在進行中の現象をデータとして用いることから、「文法化現象を直接観察し、文法化が進行する過程を理論化することができる」という点で通時的文法化研究の問題点を克服していると考えられる。

したがって、理論的構築においては一般的な文法化研究よりも適していると考えられ

る。

第6節 共時的類型論に基づく日本語のモダリティのプロトタイプ性に関する考察

6-1. 研究方法

「共時的類型論」によれば、言語習得と意味変化の順序の間にはプロトタイプ的なものから周辺的なものの順に発展するということが、及び習得におけるストラテジーと文法化の内的要因であるコミュニケーションストラテジーという点において並行の関係が見られることがわかる。このような共時的類型論の概念に基づき、筆者は、中国人日本語学習者のモダリティの習得調査を行ってきた。対象としたのは①「べきだ」・「はずだ」、②「なければならない」・「にちがいない」、③「ものだ」という3組のモーダルマーカ―の習得である。この3組を対象とした理由は、中国語と日本語では形式と意味・機能のマッピングの違いが言語習得に及ぼす影響を分析するためである。

先述したように、中国語は英語などと同様、「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の間に多義性が見られるが日本語ではその多義性が存在しないのが一般的である。つまり、中国語のモーダルマーカ―は1つの形式で2つのモダリティとしての意味・機能を持ち、「行為拘束的モダリティ」のほうがプロトタイプ的であるのに対し、日本語ではこれらのモダリティが2つの形式で表され、「行為拘束的モダリティ」のほうが必ずしもプロトタイプ的ではない。このように、中国語と日本語のモダリティにおけるマッピングの違いによるプロトタイプ性の違いのため、日本語のモダリティの習得が困難であることが予想される。そして、このようなマッピングの違いの組み合わせとして、中国語の yīnggāi に対する日本語の「べきだ」と「はずだ」、yào に対する「なければならない」・「にちがいない」が挙げられる。

また、「ものだ」は日本語には珍しく、「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の両方のモダリティとして機能するモーダルマーカ―である。しかし、そのプロトタイプ性は言語類論的文法化研究で言われている「一方性仮説」に反して「認識的モダリティ」から「行為拘束的」用法が派生したと見なされている。そして、中国語では「ものだ」の「行為拘束的」用法は yīngdāng、「認識的」用法は yīnggāi に対応すると考えられている。

以上のように、日本語と中国語のモダリティの意味・機能のマッピングの違いが習得に及ぼす影響を分析するために、中国語と日本語でマッピングが1対2である「べきだ」・

「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」、マッピングが2対1である「ものだ」の習得調査を行った。また、マッピングの違いをより明確に分析するため、機能主義言語学に基づく言語習得理論の一つであるBates and MacWhinney (1981) の競合モデル (The Competition Model) に基づくタスクを通して得られた結果を分析した。以下はタスクの例である。

課題は、以下の例(4)のように、被験者に、与えられた文を読んで文脈的に適切なモーダルマーカ―1つを選択してもらおうというものである。それぞれの問題に対して4つの選択肢を与えるが、その中に「ものだ」の「行為拘束的」用法1つと「認知的」用法1つを必ず含めた。例(4)を用いて説明すると、次のようになる。

(4) 詳しい事情も知らないくせに、()

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 助言をするものではない | 2. 助言をさせないものだ |
| 3. 助言をしてもいい | 4. 助言をするかもしれない |

(4) では被験者に () に入る最も適切なモーダルマーカ―を含む文を1～4から選んでもらう。この選択肢の1の「ものだ」の「行為拘束的」用法と、2の「ものだ」の「認知的」用法はともに競合するモーダルマーカ―である。このような問題を20問用意した。同様に、「なければならない」と「にちがいない」を含む4つのモーダルマーカ―を含む文から選ぶ問題、「べきだ」と「はずだ」を含む4つのモーダルマーカ―を含む文から選ぶ問題をそれぞれ20問づつ用意した。被験者は60名で、日本語能力試験2級の文法問題の結果、正解率80%以上を上級、正解率60～80%を中級、60%以下を初級とし、それぞれ20名から成っている。そして、有意差検定によってそれぞれの学習段階の学習者によるモーダルマーカ―の選択の違いの分析を行った。

6-2. 調査結果

調査の結果、以下のような知見を得た。

(5) 「なければならない」と「にちがいない」の習得に関しては、学習者は学習の初期段階から別の機能を表すモーダルマーカ―であると認知していた。

(6) 「べきだ」と「はずだ」の習得に関しては、初級学習者は「べきだ」が正解のとき

も「はずだ」が正解のときも「べきだ」を選択する傾向があるが、中級学習者はどちらの場合も「はずだ」を選択する傾向がある。そして、上級学習者は文脈に合わせて適切なモーダルマーカ―を選択する。

- (7) 「ものだ」の習得に関しては、初級学習者は「認知的」用法の正解率が高く、中級、上級学習者になるにしたがって「行為拘束的」用法の正解率が高くなっている。

以上の結果から共時的類型論の概念に基づいて日本語のモーダルマーカ―の意味変化の方向性を類推すると、次のようなことが言える。

- (8) 「なければならない」と「にちがいない」の間には連続性がなく、どちらがプロトタイプ的とはいえない。
- (9) 中級学習者が「べきだ」が正解のときにも「はずだ」を選択するということは、両者の間には何らかの連続性があり、「はずだ」のほうがプロトタイプ的であると考えられる。
- (10) 「ものだ」に関しても初級学習者は「認知的」用法のほうを先の習得することは「ものだ」の2つの用法の関係において、「認知的」用法のほうがプロトタイプであることを示唆している。

これらのことは、日本語ではむしろ「認知的モダリティ」の方がプロトタイプ的であることを示唆する一群のモーダルマーカ―が存在することを意味している。³

第7節 新しい「応用認知言語学」としての「共時的類型論」研究に基づく類型論的文法化研究

これまでの研究における習得調査はすべて中国語を母語とする学習者を対象としたものであった。しかし、習得調査の(5)と(6)の結果から、日本語だけでなく学習者の母語である中国語のモーダルマーカ―の意味変化の方向性も類推することが出来る。第二言語習得において第一言語のカテゴリー化の影響を受けると考えるなら、(6)の初級学習

³ 玉地・堀江(2007a, 2007b, 印刷中)、Tamaji & Horie(2007b, 2007d) 参照。

者の「べきだ」の多用は母語である中国語のyīnggāiの「行為拘束的」用法のプロトタイプ性を反映しているが、(5)の「なければならない」と「にちがいない」の習得においては学習の初期段階から別の意味・機能をする形式であると認識していることから、中国語においても日本語と同様、「行為拘束的モダリティ」と「認知的モダリティ」が別のモーダルマーカースで表現されている可能性があることを示唆している(玉地 採録済み)。このことは、中国語のモーダルマーカースの文法化において、言語類型論的な文法化研究において観察されるように「認知的モダリティ」が「行為拘束的モダリティ」から派生したものであるとは言い切れないことを示唆している。

そこで、日本語以外の言語に関しても、「共時的類型論」の観点から第二言語習得データに基づいて当該言語の文法化の方向性を類推する研究を行いたいと考えている。そのために、(I)日本語と異なったモダリティの体系を持つ中国語と、(II)日本語と類似したモダリティの体系を持つ韓国語を対象とし、中国語・韓国語を学習する日本人学習者の第二言語習得データから中国語や韓国語のモーダルマーカースの文法化の方向性と文法化を促進する要因の考察を行う。これらの言語の文法化現象を通して、東アジア言語の「モダリティの意味分化の方向性」の背後に何らかの認知・文化的な共通基盤「モデル」を仮構できるかどうか、といった興味深い「言語・認知・文化」に関わる研究課題への示唆が得られると考える。

第8節 まとめ

本研究は、本来は母語と目標言語で形式と意味・機能のマッピングの違いが習得に及ぼす影響を分析することを目的とする「応用認知言語学」の研究として出発したものである。しかし、その習得調査の結果から「モダリティの意味変化の方向性」を類推できること、また「共時的類型論」に基づいて日本語以外の言語の習得調査から当該言語の「モダリティの意味変化の方向性」を類推し、それらの言語に共通する認知・文化的モデルの構築へと発展することが可能となるという着想を得た。このように、類型論的に異なる言語の学習者の習得調査からそれらの言語の意味変化の方向性の比較を行い認知モデルを構築することは、類型論の対象研究によって共通の認知・文化モデルを見出そうとする「認知類型論(Cognitive Typology)」(Kemmer 2003)にも共通する。したがって、この研究を通して、複数言語の第二言語習得データから共通の文法化モデルを構築し、文法化の類型論的研

究を行なうというように、第二言語習得の知識を認知言語学の理論へと還元するという、「応用認知言語学」研究を新しい方向性として確立したいと考える。

参考文献

(英語文献)

- Baron, N. 1977. *Language Acquisition and Historical Change*. Amsterdam: North-Holland.
- Bates, E. 1999. "Language and the infant brain". *Journal of Communication Disorders* 32, 195-205.
- Bates, E. & MacWhinney, B. 1981. "Second Language Acquisition from a Functional Perspective: Pragmatic, Semantic & Perceptual Strategies". In H. Winitz (ed.) *Annals of Science Conference on Native and Foreign Language Acquisition*. 198-219. New York: New York Academy of Sciences.
- Battye, A. & Roberts, I. 1995. *Clause Structures and Language Change*. New York: Oxford University Press.
- Bickerton, D. 1984. "The Language Bioprogram Hypothesis". *Behavioral and Brain Sciences* 7. 173-221.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Bybee, & Pagliuca, W. 1985. "Cross-linguistic Comparison and the Development of Grammatical Meaning". In J. Fisiak (ed.) *Historical Semantics and Historical Word Formation*. 59-83. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bybee, J., Perkins, R. & Pagliuca, W., & Perkins, R. 1994. *The Evolution of Grammar, Tense, Aspect and Modality in Languages of the World*. Chicago: Chicago University Press.
- Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm
- Croft, W. 1990. *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eckert, P. 1989. *Jocks and Burnouts*. New York: Teachers Colledge, Columbia University.
- Erbaugh, M.S. 1986. "Taking Stock: the Development of Chinese Noun Classifiers Historically and in Young Children" In C. Craig (ed.) *Noun Classes and Categorization*. 36-71. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Giacalone-Ramat, A. 1992. "Grammaticalization Processes in the Area of Temporal and Modal Relations". *Studies in Second Language Acquisition* 14.3.4, 297-322.
- Giacalone-Ramat, A. 2003. (ed.) *Typology and Second Language Acquisition*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Giacalone-Ramat, A. & Crocco-Gales, G. 1995. *From Pragmatics to Syntax: Modality in Second Language Acquisition*. Tübingen: Gunter Narr Verlag
- Gould, S.J. 1977. *Ontogeny and Phylogeny*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heine, B. 1993. *Auxiliaries, Cognitive Forces and Grammaticalization*, Oxford: Oxford University Press.
- Heine, B. & Kuteva, T. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, P. J. & Traugott, E.C. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, P. J. & Traugott, E.C. 2003. *Grammaticalization, 2nd ed.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Keenan, E. & Comrie, B. 1977. "Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar". *Linguistic Inquiry* 8, 63-99.
- Kemmer, S. 2003. "Human Cognition and the Elaboration of Events: Some Universal Conceptual Categories". In M. Tomasello. (ed.). *The New Psychology of Language*. Vol. II . LEA. 89-118.

- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: Chicago University Press.
- Li, R. 2003. *Modality in English and Chinese: a Typological Perspective*. Amsterdam: Lighting Source Incorporation.
- Milroy, J. & Milroy, L. 1985. *Authority in Language: Investigating Language Prescription and Standardization*. London: Routledge.
- Palmer, F. R. 2001. *Mood and Modality 2nd ed.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Pütz, M., Niemeier, S. & Renè, D. (eds.) 2001. *Applied Cognitive Linguistics I: Theory and Language Acquisition*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Shepherd, S.C. 1982. "From Deontic to Epistemic: an Analysis of Modals in the History of English, Creoles, and Language Acquisition". In A., Ahlqvist. (ed.) *Papers from the 5th International Conference on Historical Linguistics*. 316-323. Amsterdam: John Benjamins.
- Slobin, D. I. 1977. "Language Change in Childhood and in History". In J., Macnamara. (ed.), *Language Learning and Thought*. 185-214. New York: Academic Press.
- Slobin, D. I. 1994. "Talking perfectly. Discourse origins of the present perfect." in W., Pagliuca (ed.) *Perspective on Grammaticalization*. 119-23. London: Longman.
- Slobin, D. I. 2001. "Form-function relations: how do children find out what they are?". in M., Bowerman. & S., Levinson (eds.) *Language acquisition and conceptual development*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, E.E. 1988. "Grammaticalization and Semantic Bleaching". *BLS* 14, 389-405.
- Sweetser, E.E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, L. 1988. "Force Dynamics in Language and Cognition". *Cognitive Science* 12, 49-10
- Tamaji, M. & Horie, K. (2007b) "What L2 Acquisition Data Reveals about the Directionality in Grammaticalization: A Case of Japanese Modal Marker *mono-da*". *Proceedings of the 3rd Seoul International Conference on Discourse and Cognitive Linguistics*. The Discourse and Cognitive Linguistics Society of Korea. 470~480
- Tamaji, M. & Horie, K. (2007d) "What L2 Learners' Processing Strategy Reveals about the Modal System in Japanese: A Cue-based Analytical Perspective" *Proceedings of the 21st Pacific Asia Conference on Language Information and Computation*". The Korean Society for Language and Information. 471-480.
- Traugott, E.C. 1986. "From Polysemy to Internal Semantic Re-construction". *Proceedings for Berkeley Linguistic Society* 12. 539-550.
- Traugott, E.C. 1989. "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change". *Language* 65, 31-55.
- Traugott, E.C. & König, E. 1991. "The Semantic-pragmatics of Grammaticalization Revised". In E. C., Traugott. & B., Heine. (eds.) *Approaches to Grammaticalization vol. 1*. 189-218. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, E. & Heine, B. 1991. *Approaches to Grammaticalization. vol. I & II*. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, E. C. & Dasher, R.B. 2002. *Regularity in Semantic Change 2nd ed.* Cambridge: Cambridge University Press.
- van der Auwera, J. 1998. "Modality's Semantic Map". *Linguistic Typology* 2, 79-124.
- Wong, K.S. 2004. "The Acquisition of Polysemous Forms: The Case of 'bei2' (give) in Cantonese". In O., Fischer, M., Norde. & H., Perrison (eds.) *Up and Down the Cline -The Nature of Grammaticalization*. 325-343. Amsterdam: John Benjamins.
- Ziegeler, D. 1996. "A Synchronic Perspective on the Grammaticalization of WILL in Hypothetical Predicates". *Studies in Language* 20.2, 411-42.

Ziegeler, D. 1997. "Retention in Ontogenetic and Diachronic Grammaticalization". *Cognitive Linguistics* 8.3, 207-41.

(日本語文献)

尾上圭介 2001. 『文法と意味 I』 東京：くろしお出版

黒滝真理子 2005. 『DeonticからEpistemicへの普遍性と相対性 - モダリティの日英対照研究』 東京：くろしお出版

玉地瑞穂（採録済み）「中国語母語話者の認知過程から見るモーダルマーカの意味変化の考察：第二言語習得データを基に」『認知言語学論集 8』日本認知言語学会

玉地瑞穂・堀江 薫 2007a. 「中国人日本語学習者のモダリティ習得過程に見られる中間言語：意味・形式のマッピングの観点から」『言語学と日本語教育 V』くろしお出版 53-71.

玉地瑞穂・堀江 薫 2007c 「日本語のモダリティ的意味の原型性：第二言語習得データに基づいて」『認知言語学論集 7』日本認知言語学会

玉地瑞穂・堀江 薫（印刷中）「第二言語習得データに見る「ものだ」の文法化の方向性：共時的類型論の観点から」*Proceedings of KLS (Kansai Linguistic Society)* 33

P.J. ホッパー & E.C. トローゴット（日野資成訳）2003. 「文法化 (Grammaticalization)」九州大学出版会

宮下博幸 2006. 「文法化とは何か」『早稲田言語研究会会報』10, 20-46.

森山 新 2007. 「第二言語としての日本語の多義語の習得と日本語教育への応用」『第 8 回日本認知言語学会発表予稿論文集』日本認知言語学会 137-153.

山田小枝 1990. 『モダリティ』 東京：同学社